

第 7 4 回北摂小児科医会プログラム

日時：平成 25 年 7 月 27 日（土）午後 3 時

場所：宝塚市立病院 北棟 3 階 講堂 1

〒665-0827 兵庫県宝塚市小浜 4-5-1

TEL：0797-87-1161

第 74 回北摂小児科医会 プログラム

日時：平成 25 年 7 月 27 日（土）午後 3 時

場所：宝塚市立病院 北棟 講堂 1

〒665-0827 兵庫県宝塚市小浜 4-5-1 TEL：0797-87-1161

◇話題提供(15：00～15：10)

「成長ホルモン製剤(ヒューマトロップ) 関連情報」

日本イーライリリー株式会社

◇一般演題(15：10～16：40)

前半の部 座長 澤山 薫 先生（宝塚市立病院 小児科 主任医長）

1) 『メッケル憩室茎捻転の 9 歳男児』

西宮市立中央病院 小児科

門谷真二、戸田彩季、柏原米男、中島良一

症例は 9 歳男児。入院前日朝より腹痛認め近医で点滴、血液検査施行し検査結果異常なく帰宅。その後嘔吐認め、腹痛おさまらず翌日他院で血液検査行い炎症反応高値で虫垂炎の疑いで紹介となった。37.4℃の微熱あり顔色不良で腹痛強く歩行不可であった。腹部全体特に右下腹部に圧痛強く虫垂炎の疑いで腹部 CT 検査施行した。CT ではメッケル憩室炎が疑われたが腹部症状強く手術施行しメッケル憩室茎捻転と診断しメッケル憩室切除術を行った。

2) 『小児における上部 UTI 急性期での MRI 拡散強調画像 6 例の検討』

箕面市立病院 小児科¹、大阪大学医学部附属病院 小児科²、大阪府立母子保健総合医療センター 腎・代謝科³、大阪市立総合医療センター 放射線科⁴、箕面市立病院 放射線科⁵

武鍵真司¹、杉辺英世¹、中山尋文²、木島衣理¹、金野浩¹、溝口好美¹、山本勝輔³、下辻常介¹、中山人美⁴、中島和広⁵、井上豊⁵、山本威久¹

【対象】発熱、血液検査所見、細菌尿から、UTI と診断した小児 6 例。年齢は 3 ヶ月～9 歳。【方法】入院 3 日以内に MRI 拡散強調画像を撮影した。【結果】4 例に上部 UTI を示唆する、腎髄質から皮質にかけての楔状の高信号域を認めた。【考察】小児における上部 UTI は特徴的な臨床症状に乏しく診断が困難であるが、最近、MRI 拡散強調画像による診断が報告されている。今回小児 6 例を検討した結果、MRI 拡散強調画像は上部 UTI 急性期の診断に有用であると思われる。

3) 『ムンプスワクチンによる脳炎の一例』

市立豊中病院 小児科

後藤実加、福田ひとみ、木村丈、横井健人、若林珠美、波多野麻依、川上展弘、吉川真紀子、徳永康行、茶山公祐

ムンプスウイルスの感染による流行性耳下腺炎は耳下腺腫脹の他、無菌性髄膜炎や睇炎、脳炎や難聴などの合併症があげられる。日本ではワクチンの任意接種により予防を行っているが、ワクチンの副反応でもごく稀にこれらの合併症が起こりえることが知られている。今回我々はワクチン接種の 14 日後に発症した脳炎の一例を経験したため、文献的考察を含めて報告する。

後半の部 座長 長坂 博範 先生（宝塚市立病院 小児科 部長）

4) 『急性呼吸窮迫症候群（ARDS）に対して respiratory ECMO を行った 1 例』

県立塚口病院 小児救急集中治療科

大場彦明、山上雄司、大西聡、管健敬、高原賢守、中條悟

症例は 5 歳男児。某月 15 日に肺炎のため前医に入院し治療を行われたが、呼吸状態の悪化と無気肺の拡大を認め 19 日に当科転院となる。転院後より気管挿管、人工呼吸管理を開始した。20 日に PaO₂/FiO₂ が 110mmHg となり胸部レントゲンで両側肺野の浸潤影を認め ARDS と診断した。その後も、高濃度酸素と高い呼吸器設定を要する状態が続き、救命と人工呼吸関連肺損傷を防ぐ目的で 23 日に VA-ECMO を開始した。28 日に ECMO を終了し、翌月 2 日に抜管した。後遺症なく退院となった。

5) 『9 番染色体の不均衡型相互転座を認めた West 症候群の 1 例』

市立伊丹病院 小児科¹ いぬいこどもクリニック²

山口智裕¹、神尾範子¹、松村梨紗¹、中里寿美子¹、薮田玲子¹、有田耕司¹、三木和典¹、乾幸治²

症例は 6 か月の男児。1 か月前よりあやし笑いがなくなる等の症状から始まり、その後 spasms がシリーズ形成して出現したため、近医を受診し当科紹介受診となった。脳波にて hypsarrhythmia を認め West 症候群と診断。頭部の CT・MRI では明らかな異常は認めず、ACTH 療法を行い spasms の症状出現より約 1 か月で発作の消失を認めた。染色体検査で 9 番染色体の不均衡型相互転座が認められ、症候性と考えられた 1 例を報告する。

6) 『副鼻腔炎から波及した眼窩蜂窩織炎の一例』

宝塚市立病院 小児科

近藤杏子、多久和真由子、澤山薫、長坂博範

症例は 2 歳の男児。発熱、右眼瞼腫脹、疼痛を主訴に入院した。血液検査にて、好中球数 18104/ μ l と著明な高値を認め、眼瞼周囲浮腫が著明であったことから、眼窩深部感染が疑われた。頭部造影 CT 検査にて、右眼瞼皮下の腫脹、右上顎洞と篩骨洞の炎症像と右眼窩内側への炎症の波及を認めた (Chandler 分類 II 型)。副鼻腔炎は比較的頻度の高い疾患であるが、重篤な合併症をおこすことがあるため、場合によっては積極的な画像検査が必要である。

7) 『父子感染と考えられる B 型肝炎幼児症例』

宝塚市立病院 小児科

多久和真由子、近藤杏子、西村美香、澤山薫、長坂博範

症例は現在 2 歳 6 カ月の女兒。1 歳 6 カ月時、高熱のため近医受診し肝機能障害を指摘され当科紹介受診。受診時 AST118 IU/L、ALT 187IU/L、ウイルス検索にて HBV 感染が判明；HBsAg 精密（定量）、24000；HBs 抗体、9.9 以下；HBe 抗原（CLIA）、1363.9；HBe 抗体（CLIA）、0.1；HBc 抗体（CLIA）、13.37。母は HB 陰性であるが、1 年前に父が急性 B 型肝炎にて当院内科入院している。患児の肝機能は大きな変化はないが、保育所にて一緒に遊んでいた子の唇を嚙り出血させた。患児のウイルス型はヨーロッパ型ということであった。



----- コーヒータイム -----
(16 : 40～16 : 55)



◇総会 (16 : 55～17 : 00)

◇特別講演(17 : 00～18 : 30)

座長 山本 威久 先生（箕面市立病院 副院長）

『小児の B 型肝炎の実状』

演者 済生会横浜市東部病院 小児肝臓消化器科 顧問 藤澤 知雄 先生

HBV 母子感染の予防のみでは B 型肝炎を撲滅できない。すなわち HBV キャリアの父親から小児への感染は約 10%存在する、保育園などの施設での感染も無視できない、日本にまれであった遺伝子型 A の HBV 感染が主に性感染症（STI）として急速に蔓延した、たとえ一過性感染でも HBV DNA は宿主の肝臓細胞核内に潜み、特殊な免疫抑制状態で再活性化すること、UV 未施行であると感染者への差別や偏見が解決しない、などが明らかになった。

共催：北摂小児科医会／日本イーライリリー株式会社

【会場までの案内地図】



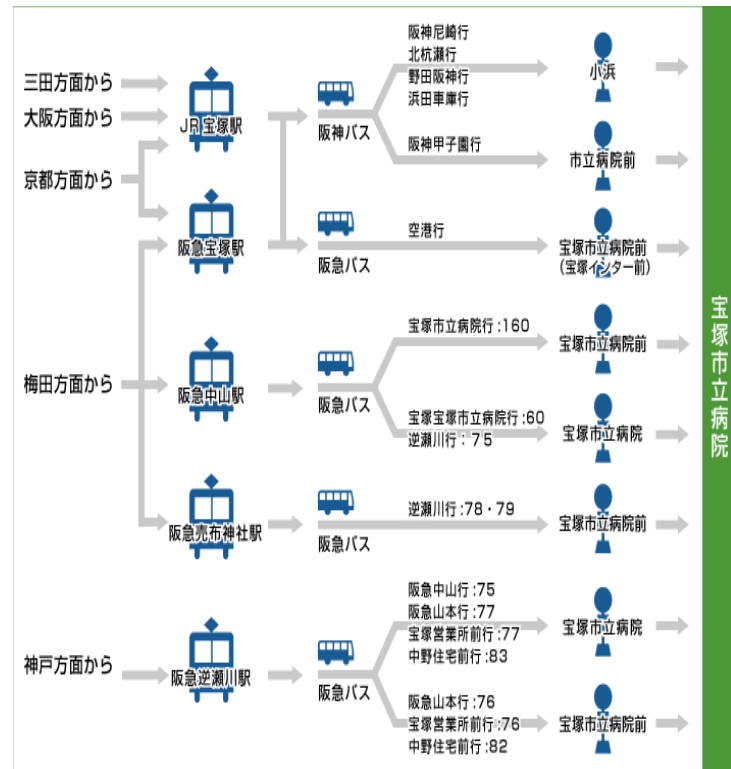
＜お車をご利用の方＞

当日は**第1駐車場**をご利用下さい。

(第2駐車場は閉鎖しております。)

駐車サービス券を会場内にて発行いたしますので必ず駐車券をお持ち下さい。

＜公共交通機関をご利用の方＞



詳細はホームページをご覧ください。

